論文の内容の要旨

論文題目　社会問題と帝国問題から民衆の政治的主体化まで―幸徳秋水と浮田和民、吉野作造、大杉栄、山川均

氏名　詹　亜訓

本稿では社会問題と帝国問題の連鎖という視座を提起し、明治末期から大正期にかけて展開した帝国・帝国主義とデモクラシー、民衆をめぐる議論に着目する。全体的な問題設定は 1896 年に初登場した社会問題と共振した帝国問題の言説形成が、いかに明治末期の帝国主義と社会主義にたいする認識につながり、第一次世界大戦後帝国秩序の再編成と社会問題の再登場にともなって現出した民衆の政治的主体化の課題に影響を与えたかということである。本稿の分析の時期と対象、そして主な課題は、(1) 1896 年～1911 年のあいだの幸徳秋水と浮田和民の社会問題と帝国主義をめぐる議論(第二章)と、(2) 1912 年～1918 年のあいだの浮田と吉野作造の民衆政治論と、吉野と大杉栄、山川均の社会問題と帝国問題をめぐる議論および民本主義論争(第三章)、(3) 1918 年～1924 年のあいだの吉野と大杉の労働問題論とアナーキズム再解釈と、大杉と山川のあいだに起きたアナ・ボル論争(第四章)にわけられる。

1960 年代以降成立した社会帝国主義研究と生政治系譜の社会問題研究の両研究群に触発された社会問題と帝国問題の連鎖の問題関心に基づき、本稿の第一章では、学説史とその歴史性を振り返って、(非)領土化と捉えられる領土化―非領土化の観点を提示したうえで、関連する課題を述べる。また、戦後歴史学の視点転換からその後「社会の発見」

の研究潮流、そしてフーコー思想に触発された規律権力の大正デモクラシー観にいたるまでの、社会問題と帝国問題に関連する研究状況から、天皇制国家批判(堀尾輝久論文)と、明治国家と明治社会主義研究(松沢弘陽論文)、民衆史の観点を含む近代批判としての明治・大正社会主義研究(鹿野政直論文)、「社会の発見」研究の濫觴とその批判的再検討(飯田泰三論文と芹沢一也論文)といった先行研究を整理する。各章節では比較的注目されない観点とまだ十分に検討されていない資料、独自の課題設定に基づき、一般的な叙述では把握しにくい社会問題と帝国問題の連鎖および民衆の政治的主体化に焦点をあてる。

社会問題と帝国問題の連鎖を中心に、第二章では幸徳と浮田それぞれの帝国主義論を支えた社会問題観と、それに対応した「社会主義」と帝国主義論との内在的ロジック、つまり、資本主義と国民国家統一の論理を示す。そのなかで、マルクス思想を受容してさらにアナーキズムに傾いた幸徳の思想にかんしては、生政治系譜の研究における領土化の議論との共通点が見出されるとともに、非戦・非国民の社会主義／帝国主義の構図が歴史学派経済学に媒介された社会公共の論理から再検討される。そのうえで、帝国主義論から直接行動の表出にいたる一貫した社会化と(非)領土化の性格を座標軸として、幸徳思想における思想的連続性が指摘される。そして、倫理的帝国主義で知られる浮田の論理にかんしては、その背後にあるアリストテレスの *zoon politikon* の再解釈とトライチュケ政治学の部分的受容、政治の術としての社会学認識から論じられる。そのうえで、「内に立憲主義、外に帝国主義」と「内に社会主義、外に帝国主義」を同時に掲げた浮田思想における立憲政治と帝国主義、「社会主義」の相互補完を示す。最後に、社会帝国主義研究の観点を借りて、この章では、征服の行動をもとにした近代国家の主権観念と社会領域の否定をつうじて人民主権を退けた浮田の論理を、彼が語る「倫理」に内在した帝国主義への牽制と社会・大衆の後退の両義性から検討する。

第三章では、大逆事件後から第一次世界大戦まで浮田と吉野、大杉、山川の社会問題と社会主義、帝国秩序、帝国主義、デモクラシーをめぐる議論が取り上げられる。主な分析対象は大逆事件後浮田と吉野の社会主義と民衆政治をめぐる論評をはじめに、吉野の帝国秩序論と国家理論、大杉の社会主義の自己克服と社会的個人主義の思想展開、山川の階級と帝国に関連する批評を経て、吉野と大杉、山川の民本主義論争までの言説状況である。明治末から大正前期までの時期にしぼったこの章では時代の転換期と世代間の思想の変遷を重視し、民本主義論争までの思想状況を明治期帝国主義論の延長から捉え、大戦期帝国秩序の激変とデモクラシーの台頭にともなう思想的変容を述べる。社会問題と社会主義への対応が内在した明治帝国主義論を背景として、加えて大逆事件後の社会状況にともなって、大正前期立憲主義者と社会主義者のあいだの対立図式は変容した。その大枠は社会主義批判、帝国問題と民本主義の内的関係から生まれた葛藤であると捉えられた。全体的に、大正期に入って社会主義／帝国主義(幸徳)と「社会主義」を内包した「内に立憲主義、外に帝国主義」(浮田)という明治末期の社会問題・帝国問題認

識の緊張関係は、民本主義批判・社会的個人主義／国家主義(大杉)と民本主義批判・第四階級民主主義／資本主義—帝国主義(山川)／「内に民本主義、外に東洋覇権」(吉野)の対立図式に変化したと説明される。

第四章では、第一次世界大戦後ふたたび注目を集めた社会問題と帝国秩序の再編成を切り口に、民本主義論争以降吉野政治学と大杉アナーキズムの対立図式の変容を中心に検討する。そのうえで、大杉と山川のあいだに起きたアナ・ボル論争を含む民衆の政治的主体化をめぐる議論の位相にかんしては、社会化と(非)領土化の観点に加え、政治主義と新しい政治の創出、政治の対抗の観点から明らかにする。要は明治社会主義運動と大正社会主義運動の連続と断絶の再検討に加え、社会問題と帝国問題の連鎖からみた 20 世紀の第一四半期の思想的変遷を社会的要因と絡み合った政治の側面から論じるのである。具体的に、まず、「内に民本主義、外に国際民主主義」と社会改造論、「無政府」的主権論から大正後期吉野政治学における社会主義とアナーキズムの再解釈と民本主義以来一貫した「政治主義」の反復が示唆される。次に、主体化論の方向性に沿い、クロポトキン思想とプルードン思想を媒介して大杉の労働運動論を支えていた連合主義思想の受容からいわゆる白紙主義と「労働者の自己獲得」の論理が再検討される。そして、「政治の否定」をめぐる立場の相違は、あらためて政治主義と新しい政治の創出、政治的対抗といった政治をめぐる論理の緊張関係として捉えられる。

最後に、第五章では、(非)領土化の観点からみた東アジアにおける社会問題と帝国問題の意義と展望が述べられ、生政治系譜の社会問題研究といわゆる「社会の発見」研究の接点としてのポテンシャルが示唆される。そのうえで、社会問題と帝国問題の連鎖という視座は、さらに植民地主義の課題へと広がり、入植者植民地主義と植民地近代を含む比較的最近の研究の動向につながるように論じられる。